

こんにちは。ご紹介いただきました三谷です。

演題は「掛中・掛西高の伝統を考える」ですが、私はもとより研究者でもなんでもなく、この1年間、掛中・掛西高の創立時のことを調べるなかで「こんなことがポイントなんだろうな」と思い付いたことをご紹介しながら、結局わからなかった謎に対する仮説をお話し、最後に一つのご提案をするということが趣旨です。なお以下、掛中・掛西高を「掛西」と略称します。



ではまず東京冀北会ですから、東京と掛川、両方に関係する話から始めます。

画像1をご覧ください。これはお茶の水駅の東口を出た先にある樹に掛かっている札ですが、「太田姫神社 元宮 旧名 一口稲荷」とありますね。これは15世紀の中頃に江戸城を築いた太田道灌のお姫様が痘瘡、天然痘ですね、痘瘡に感染した時に、痘瘡退治の神様である京都の一口稲荷を江戸城内にお迎えしたものです。

この神社は17世紀の初めに徳川家康が江戸城の拡張工事をした時に、この場所に移され、昭和6年に総武線開通のため、西南に約400m行った場所に移されました。それが**画像2**です。提灯に桔梗の紋が見えますね。これは太田家の紋です。

画像3の太田家系図をご覧ください。徳川家康という人は名門好きで、江戸城に入ると早速太田道灌の子孫を探します。そして玄孫の重正を家臣とし、重正の妹のお勝を側室とします。重正の5代後の資俊から7代続けて掛川藩主となり、明治維新を迎えます。

また、お勝は娘を早く失ったので、徳川家康が水戸徳川家の初代頼房を養子にしてやります。そして重正の子、資宗は徳川家康の命令でお勝の養子になります。つまり浜松城主となった太田資宗と徳川頼房とは義兄弟です。

太田道灌って今はどのくらいの人を知ってるんでしょうか。落語の好きな人はご存知ですよね。あるとき狩りに出掛けたら雨が降ってきた、そこで近所の家に雨具を借りに行ったら、その娘が黙って山吹の花を差し出したので「私は花が欲しいのではない」と怒って帰ってしまい、お城でその話をしたら「それは『七重八重花は咲けども山吹の実の一つだに無きぞ悲しき』という歌を踏まえたもので『ご免なさい、蓑はありません』という意味です」と教えられたので大いに恥じて、それから歌の道に精進し、後に文武両道の達人となったという武将です。

太田重正が本当に太田道灌の子孫かどうかは疑問なしとしませんが、「掛川藩主の

太田家が太田道灌の子孫であると自ら認識していたこと」、これは事実ですし、掛西の伝統を考えるポイントの一つです。それから、「太田家と水戸徳川家とはともに徳川家康の側室のお勝を始祖とする親戚であること」、これもポイントの一つです。

画像4は掛西の校章ですね。葛の葉3枚の間に見えるのは何でしょう。応援団の赤松さん、どうですか。そう、これは桔梗の蕾なんです。

画像5は、平成17年に今の掛川市が誕生したときに制定された市のシンボルマークですが、桔梗の花にアルファベットのKを組み合わせたものですね。でも同時に制定された掛川市歌からは「桔梗が丘」が落ちてしまいました。

私は菊川の生まれだからサッパリ分からなかったけれど、第2応援歌の「進め若人、桔梗が丘に」の桔梗が丘って天守台の高台のことだったんですね。高校卒業後43年も経って初めて知りました。

掛川東高が掛川西高より西に移転しても、掛川東高という名前のままなのは抵抗がありますが、学校祭をいまだに「桔梗が丘祭」としているのは共感できます。

さて菊川市には菊川という川が流れています。というより昭和29年の合併でできた町に菊川という川が流れていたから、菊川町と名付けた訣です。大井川町・富士川町・豊川市、みんなそうですね。だから掛川市に掛川と言う川が流れていないことは本当に不思議でした。でも、この話の前に逆川って何が逆さなんでしょう。栄川中学出身の伊村さん、どうですか。そう、昔は原野谷川や太田川の上流で大雨が降ると、逆川が逆流したので、逆川なんですね。

ところで最近パワースポットとして人気が出ている日坂の事任八幡宮にこの自然現象を神話仕立てにした伝説が伝わっています。それはこんな話です。

ある日、遠州灘の竜宮の「竜王様」と事任八幡宮の「事任様」とが碁を打っている時に、その様子をご覧に出てこられたお姫様に一目ぼれた竜王様は、家来の雌雄2頭のクジラを呼んで、姫を貰って来るように伝えました。2頭のクジラは遠州灘から太田川を經由して、事任八幡宮を目指して川を遡って来ましたが、大きなクジラが狭い川を遡ったので川の水は逆さに流れて行くように見えました。それから人々は、その川を「逆川(さかがわ)」と呼ぶようになりました。

事任八幡宮に到着したクジラは「事任様」にお伝えしたところ、きっぱりとお断りされてしまいました。これを聞いたクジラは「事任様」に襲い掛かりました。そこで「事任様」はとっさに碁石をクジラに投げつけました。碁石をくらったクジラは、七日七晩の間、辺りを真っ暗闇にしてしまいます。その暗闇に包まれてしまった村を「倉真(くらみ)村」と呼ぶようになりました。はい、画像6が2頭のクジラが山になった跡です。

この話って何かデジャブ感というか、どこかで聞いたような感じがしませんか。応援団

の森下さん、如何ですか。そう、校歌4番の「鯨鯢崩れて潮湧く」って多分このことなんでしょうね。「遠つ淡海の灘」って、遠州灘ですしね。あとで**文書1**を見てください。

今の逆川からは想像もできませんが、以前は大雨のたびに洪水と氾濫が繰り返され、堤が欠けることから「欠ける川」と呼ばれ、字面が悪いので「掛川」となったようです。だから掛川＝逆川なのでした。これについては**文書2**をご覧ください。
逆川では字面が悪いので、中学校の名前は「栄川」になったようなものですね。

ちょっと話が現代に飛んでしまいましたが、18世紀後半～19世紀初頭の掛川藩主に太田資愛という人がいます。老中になっています。この資愛は19世紀初頭に当時の大学者、松崎慊堂を招聘して、藩校「北門書院」を設立します。後に「徳造書院」と改称され、さらに1860年に「教養館」と改称されます。

そこで**文書3**をご覧ください。これは掛川市長の松井さんのブログですが、「教養」が掛川発の言葉であることをナイーブに喜んでいらっしやいます。でも不思議なんですよ。教養は中世では「祖先の弔いをする」という意味です。また現在の「文化に関する広い知識」という意味で使われるのは大正時代以後で、明治初期には現在の「教育」の意味で使われており、その初出は明治3年の『西国立志編』とされています。**文書4**をご覧ください。すると『西国立志編』の10年前に掛川藩校を「教養館」と改称したのは誰なのか。これは謎です。下から6行目の山崎万右衛門は覚えておいてください。

さて掛川藩主は太田道灌の子孫を自認していますから教育熱心で、藩校は武士だけでなく、平民にも開放されていました。従って、冀北学舎設立者で前期掛川中学初代校長の岡田良一郎も幕末の文久3年～慶応3年の5年間、教養館で学んでいます。ところで、掛川中学初代校長の柳生寧成も慶応3年～慶応4年の2年間を教養館で学んでいますから、2人の初代校長は幕末に知り合っていたのかもしれませんが。

岡田良一郎については年譜もできているくらい有名な方ですから、特に説明の必要はないと思いますので、同時代資料をご紹介します。**画像7**を見てください。明治8年の浜松県の職員録です。少属に岡田の名前が見えますね。県でNo.3の大属は大江孝文という人物ですが、冀北学舎の初代英語教師の大江孝之の父親です。次に明治13年の静岡県職員録を見ると、佐野城東郡長として岡田の名前が見えます。これは行政区画としての郡が成立したためです。**【依田佐二平のこと】**

次に**文書5**を見てください。これは明治13年1月に福沢諭吉が浜野慶応義塾長ほかに宛てた手紙ですが、「岡田良一郎から冀北学舎の英語教師を依頼されたから誰か適任者はいないか？」という内容です。岡田良一郎と福沢諭吉との関係なんてあまり

聞いた事がないですが、面識があったのですね。実は前期掛川中学初代英語教師の黒川正には『掛川時代の回顧』という文章があり、その中に福沢から「先日、岡田良一郎という人が来たよ」という記述があります。文書6を見てください。

文書5では岡田良一郎は直接、福沢諭吉に頼みごとができる間柄で、かつ、福沢が浜野塾長に相談するなど、その依頼に真剣に対応していることが分かります。

文書6は後で申し上げますが、黒川は岡田良一郎とは気が合わなかったようなので、額面通りには受け取れません。

この大江孝之と黒川正という、冀北学舎と前期掛川中学のそれぞれ初代英語教師は沼津兵学校付属小学校の同窓生なのですが、明治の後半以降も一緒に漢詩の会を作ったりして仲が良いようです。文書7を見てください。これは明治42年に出版された『慶応義塾出身名流列伝』で、結構間違いが多い本なのですが、最後から2行目に「大江敬香」とあるのは大江孝之のことです。

少し先回りし過ぎたので、冀北学舎に戻ります。

資料の最後に付いている名簿の3ページ後半から5ページが冀北学舎の先生方なのですが、何か幕臣と慶応義塾関係者が多くですね。というより、当時はこの両者しか教師の供給元がなかったという方が正しいのかもしれませんが。これも、掛西の伝統を考えるポイントの一つと思います。

ある程度経歴の判明している8人のうち、4人が幕臣、2人が士族、2人が不明という内訳です。ざっくり「明治維新の負け組」と言って良いと思います。

大江孝之は1年弱で冀北学舎を辞めた後、新聞記者になったり、東京府へ出仕して府立高等女学校の講師となったりしていたようですが、明治24年には漢詩人として独立しました。同時代資料を見てみましょう。画像8は明治19年の東京府の職員録です。判任官5等のところに大江の名前が見えますね。下は明治23年のものです。左から6行目に大江の名前が見えますね。

堀内政治郎については、前期掛川中学のところでお話いたします。

太田有終は冀北学舎の教師になった時は50歳ですから、当時としては老人ですね。立派な髭を蓄えた写真が残っています。

次に岡健太ですが、文書5の福沢諭吉の手紙に名前が出ていましたね。明治12年時点で、大分県にある国東小学校長、13年に勸学義塾教員、14年に冀北学舎教員、そして再び国東小学校長という目まぐるしい経歴の先生です。

慶応義塾ではこの書簡を明治13年1月のものと推定していますが、明治12年1月～

明治13年12月の2年間は竹内成章が冀北学舎に在籍していますので、明治14年1月の可能性が高いでしょう。岡健太は明治14年2月から冀北学舎に赴任していますが、福沢諭吉からのお声掛かりでは選択の余地はなかったのかもしれませんが、次に久永勝成ですが、3200石の大身の旗本です。日本基督教団相良協会のホームページに名前が出てきます。文書8をご覧ください。静岡バンドという静岡のメソジスト派クリスチャンの一員になっていますね。

三浦渡世平は、私は知らないのですが、伝記が出版されているほどの立派な教育者のようです。一度覚えた単語を忘れないように辞書を食べてしまったという逸事があります。

名簿の6～7ページが前期掛川中学校の先生方になります。冀北学舎と同じで幕臣と慶応義塾関係者が多くですね。はい、掛西の伝統を考えるポイントの一つです。校長の岡田と志賀、教師では堀内と黒川以外の4人は全て幕臣です。また黒川は父が彰義隊と一緒に戦い敗走したため一家離散したので、4人の幕臣同様、「明治維新の負け組」です。

第2代校長の志賀雷山は『掛中掛西高百年史』に、黒川正の回顧を基に描写されています。東京趣味の洒脱な方だったようで、黒川とは大変に気が合ったようです。初代校頭の林惟純は会津人で、如何にも幕末維新の人という経歴です。「東京冀北」に別途寄稿しましたから、そちらをご覧ください。

さて堀内政治郎ですが文書9をご覧ください。明治4年の廃藩置県後は掛川中学校に奉職していた以外は掛川市家代で塾を開いていたようです。塾での教え子に舟木国次がいます。文書10をご覧ください。4行目の曾我政治郎とは堀内政治郎です。ところで、この舟木国次の子が明治34年に開校した掛川中学校の初代校医の舟木佳茂先生で、掛西115年の歴史の半分以上の63年間にわたり、生徒の健康を診てくださった佳茂・茂治・茂夫の舟木家3代の医家としての始祖になります。なおこの件は高34回卒の舟木伸夫さんのご教示をいただきました。また堀内政治郎の長男尚友の次女、小柳津純子さんが家代にご健在です。この件は高26回卒の東堂陽一さんのご教示をいただきました。

次に何度も出てきた黒川正です。文書11は明治13年11月2日の福沢諭吉の黒川あて書簡です。3行目に「演説講義は云々」とあるのを覚えておいてください。文書12は明治18年刊行の『岳陽名士伝』です。文書11は黒川に対する福沢の愛情が感じられるもの。また文書12には黒川と志賀

雷山とによって掛川中学校の校舎が完成した云々の記事がありますが、**文書12**は黒川へのインタビューに基づくものと思われ、岡田嫌いで志賀好きの黒川ですから、事実かどうかは分かりません。

同時代資料を見てみましょう。**画像9**は明治29年の陸軍の職員録です。左端に黒川の名前が見えますね。下は明治36年のものです。下の段の右から5人目に黒川の名前が見えますね。黒川は大正4年、約20年ぶりに静岡に戻り、翌大正5年に逝去しました。墓は初代教頭の林惟純と同じ静岡の蓮永寺にあります。

次に新莊直義ですが、この方は江戸から船で大変な苦勞をして清水へ移住した人で、その手記が残っています。高3回卒の前田匡一郎さんに、静岡銀行勤務の傍ら書き続けた『駿遠に移住した徳川家臣団』という、本来は静岡県がなすべきであろう労作があって、私もこの名簿を作成するのに大変お世話になりましたが、その中で活字化されていますので、簡単に読むことができます。

末吉英吉は明治6年に沼津の集成舎の教師になっており、同年に集成舎に入学した黒川正を教えていることが黒川の「回顧」に出てきます。「回顧」では、岡田良一郎の公私混同により、末吉が冀北学舎に出講したことになっていますが、真偽不明です。

遠藤政徳は静岡県で初めての洋画教師です。でも、開成所、つまり江戸幕府の最高学府であり、後に東京大学となるこの開成所の教師が前期掛川中学校の先生にいて、油絵を教えていたなんて本当に驚きました。

現在の掛西に直接つながる掛川中学校について話を始めるとキリが無いので、初代校長の柳生寧成についてのみ、お話をいたします。**文書13**を適宜ご覧ください。

柳生寧成は安政4年(1857年)、江戸の太田家の上屋敷で生まれました。アメリカのペリー提督が黒船で来航した4年後で、翌年にはアメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランスと修好通商条約を結ぶという、そんな時代です。

太田家の上屋敷には、万延1年(1860年)に「拭目館」という藩校が設置されましたので、おそらく8歳になった元治1年(1864年)にここに入学し、さらに幕末の動乱で、11歳の慶応3年(1867年)には掛川に移り、「教養館」で漢学を学んでいます。この慶応3年に岡田良一郎と知り合っていた可能性があることは先にお話した通りです。さて明治維新で駿河・遠江2国が徳川家の領地となり、この2国の大名はすべて今の千葉県に転封となりました。といっても通常のお国替えと違って、城も武家屋敷も無い場所に移住するのですから、移ってくる徳川家臣団も大変だけど、掛川藩士だって、同じように大変な訣です。「今度の領地には漬物石さえ無いそうだ」というので、掛川から運んだ漬物石が残っているくらい何もわからない土地への転封だった訣ですね。

文書14を見てください。これは転封先の千葉県松尾に残っている明治7年の「家禄奉還連署控」です。柳生寧成の父、寧昌の名が見えますね。柳生寧成は父、寧昌と共に先ずは松尾に移住したのでしょう。

画像10を見てください。これは松尾城の設計図です。松尾城は明治維新後に建設が始まった珍しい城なのですが、この設計図を見て何かと似ているなと思いませんか？ 渡辺さん、いかがですか？ そう、函館の五稜郭と同じ稜堡式と呼ばれる城なんです。実際には**画像11**に見られるように、地形の制約から変形3稜郭になっています。この松尾城を設計したのは名簿の1ページの磯部保忠という人物で、廃藩置県後は松尾小学校の教員になっています。でもこんなことを言うと磯部保忠には失礼ですが、現存する稜堡式城郭の五稜郭や四稜郭、長野の龍岡城の設計者は当時の兵学者として名のある人ばかりです。そうした中で無名の磯部保忠が松尾城を設計したというのは不思議な感じがします。掛川藩の兵学がそこまでの水準に達していたのか、または当時の人には常識だったのか、どうも納得がいきません。謎です。

掛川藩の武士が殆ど松尾に移住したので、幕末の掛川藩の政治と、それから政治と表裏一体の軍事については、現行の『掛川市史』を見てもあまり良く分かりませんが、そこそ高い水準だったのではないかと推測できる資料はあります。

文書15を見てください。これは昭和7年に発行された『甲賀源吾伝』の一部です。甲賀源吾は掛川藩士から幕臣となり、新選組の土方歳三と、日露戦争の英雄、東郷平八郎が幕府軍と新政府軍として相まみえた宮古湾の海戦の主将なのですが、その兄、甲賀郡之丞は安政2年(1855年)に開設された長崎海軍伝習所の一員になっています。佐賀藩48人、福岡藩28人、鹿児島藩16人、萩藩15人といったそうそうたる国持大名から派遣された伝習生の中で、掛川藩から1人参加しているんですよ。これって凄いことだと思います。この名前、甲賀郡之丞って覚えておいてくださいね。また甲賀郡之丞は、黒船到来前の弘化4年(1847年)にも、田原藩に砲術を学びに行っています。必要もないのに砲術を学びに行く訣がないですよ。

次に**文書16**を見てください。イギリス軍艦が渡来した時の対応文書が松尾の東家に残されているものです。最後の駒込御屋敷とは太田家の下屋敷のことです。もう一つは葦山代官の江川家からのものですが、新銭座稽古場とは**画像12**の右上に見える江川家の鉄砲稽古場のことです。この新銭座という地名、慶応義塾の卒業生ならば、すぐピンと来るでしょうが、明治4年に現在の三田に移る前の慶応義塾は、新銭座の鉄砲稽古場の目と鼻の先にありましてし、稽古場の中の長屋には慶応義塾の分校もありましてし、その長屋は、明治4年に葦山代官所の手代である柏木忠俊によって、

福沢諭吉に払い下げられ、三田の慶應義塾の校舎になっています。これらも覚えておいてください。

もう一つ、**文書17**です。これは福沢諭吉の明治4年1月の書簡なのですが、芝山藩の藩士が大阪の兵部省に出仕するけれど、自分は今の大阪は不案内なので、現地のあなたが宜しく世話してくださいという内容です。

大阪の兵部省とは後に大阪砲兵工廠と呼ばれる大口径の火砲を主体とする兵器の製造を担ったアジア最大規模の軍事工場ですから、ここにスカウトされるほどの人材が芝山藩にいたということです。

それにしても芝山藩に対する福沢諭吉の面倒見の良さは、これも大きな謎です。

少し最初の話に戻ります。天然痘は、日本では私の生まれた昭和31年以降、全世界でも昭和53年以降、患者が発生していません。これは皆さんもご存知のとおり、種痘によるものです。種痘は1796年にジェンナーが発明し、日本にはシーボルトが伝え、安政5年(1858年)には神田のお玉が池に東京大学医学部の前身である種痘所が設立されています。そして設立者3人の1人、戸塚静海は、元は掛川藩に仕えていた医者です。幕末の日本は、時代の要請により、西洋から軍事と医学とを主に取り入れましたが、その2分野で最高の成果を収めたのは、ともに掛川藩士なんです。

なお松尾に転封された太田資美も、藩校「教養館」の隣に病院「好生所」を作り、領民に種痘を実施しています。一口稲荷を勧請した太田道灌の子孫の面目躍如と言えるでしょう。なお一口稲荷とお玉が池種痘所の距離は1kmですから、お玉が池種痘所から高台にある一口稲荷は見えたくもありません。

少し横道に入りました。さて柳生寧成が10代前半を芝山・松尾の藩校で慶應義塾の卒業生に就いて英学を学び、廃藩置県後は駒込の太田家の下屋敷に寄留して慶應義塾の卒業生に就いて英学を学んでいたことは**文書13**に記述した通りですが、この当時の東京の英学塾は現在の学校の概念に入らないもので、英語のできる一定数の教師が複数の教場を掛け持ちで教えていたものです。例えば、前期掛川中学校の第2代校長志賀雷山も、明治8年7月に内田学校に雇われたかと思えば、2ヵ月後に自分の名前で先憂学校を設立しています。

柳生寧成が慶應義塾ではなく、東京師範学校に入学したのは経済的な理由が大きいのではないかと書きましたが、幕末・明治初期の掛川藩には柳生姓が3人いて、寧成の父、寧昌だけが11石取りで士族、あとの2人は8石取りで卒族です。もちろん領地を与えられている訣ではなく、扶持米取りです。

ですから寧成の父、寧昌はギリギリ士族に入っているくらいですから、生活は楽では

なかったと思われます。

そして明治15年に柳生寧成は東京師範学校の中学師範学科を卒業します。**画像13**は明治36年刊行の『東京高等師範学校一覽』の一部です。明治15年2月の卒業生に柳生寧成が見えますね。同期の卒業生に滝澤菊太郎という人物が、また同年7月の卒業生に篠田利英という人物が見えますね。覚えておいてください。

卒業後の柳生寧成は全国各地の中等教育機関を歴任しますが、その詳細は**文書18**をご覧ください。明治25年9月に「願いにより本官を免ず」とある以外はこれとって特徴のない経歴と言えると思います。

画像14をご覧ください。これは明治18年に出版された我が国初の「日本人による」、つまり翻訳ではない物理の教科書です。柳生寧成が芝山や松尾、東京師範学校で学んだ後藤牧太が主な著者で、柳生寧成の同級生である篠田利英や滝澤菊太郎も著者に名を連ねています。

この『小学校生徒用物理書』は日本の科学教育史上、極めて評価が高いのですが、どこまでが柳生寧成の手によるものかは分かりません。柳生寧成自身の考えを知るには**画像15**の『実験 小学教授新法』が良いと思います。エッセンスだけでもコピーを付けたかったのですが、資料が大部になり過ぎるため割愛しました。

ご興味のある方は国会図書館のサイトで電子ファイル化されていますので、パソコンで簡単に閲覧できます。

少し掛川に戻ります。**画像16**をご覧ください。これは明治22年に掛川で出版された『蕩々会講義録』です。国会図書館にも、静岡県立図書館にも、掛川市立図書館にもない本なので、はたして第3号以降が出版されているのか分かりません。

寄稿している青島泰はどんな人か分かりませんが、太田有終と堀内政治郎とは冀北学舎・前期掛川中学の先生ですね。小山朝弘・南摩綱紀は**文書19**をご覧ください。

今は南摩綱紀なんて何のリアリティもありませんが、明治三大漢学者と呼ばれた南摩が掛川で講演をしていたのなら、今で言えば村上春樹が掛川で講演をしていたようなもので、当時の掛川の文化水準の高さが窺われます。

元に戻ります。**文書13**で記載したように『水戸二高百年史』では、柳生寧成の在籍を明確に否定しています。しかし、**画像17～20**を見てください。奏任官つまり高級官僚の人事異動が官報に出て、内閣官報局の発行する『職員録』に記載されている以上、柳生寧成が明治33年度の1年間弱、茨城県高等女学校に在籍していたことは、ほぼ

疑いありません。ではなぜ柳生寧成の記録だけ残されていないのか、これも謎です。

ちょっと余談なんですけど画像17を見ると、校長は年俸600円なのに、柳生教諭は720円ですね。これは田井校長が攻玉社という私学の出身なのに対し、柳生教諭は東京師範学校を卒業しているからです。

もう少し余談で画像21をご覧ください。これは明治28年11月10日の『職員録』なんですけど、愛媛県尋常中学校の嘱託教員の夏目金之助は月給80円で首席教諭の横地石太郎と同額です。また前年に在籍していた住田校長の給料は柳生校長と同じ月60円でした。これは柳生・住田が東京師範学校卒なのに対し、夏目・横地は東京帝大卒だからです。夏目金之助が夏目漱石であることは言うまでもありませんね。

月給25円の助教諭心得、梅木忠朴という名前も見えますが、この人は黒木正と慶応の同窓生で、福沢諭吉の黒川あて書簡に出てきた演説仲間です。漱石の『坊ちゃん』の「うらなり先生」のモデルとされています。住田が「狸」、横地が「赤シャツ」です。私もこの時代に生まれて月給80円をもらいたかったと思いますが、本当にこの時代に生まれていたら、「貧乏人の倅が中学に行きたいなんて、寝言を言うな！」と親から言われて、掛川中学に進学なんて考えられなかったことと思います。

少し細かい事を言っておきます。掛川西高のホームページでは茨城県立高等女学校とか静岡県立掛川中学校とかの表記をしていますが、明治33年時点では、茨城県高等女学校であり、静岡県掛川中学校です。

静岡県で100年以上の歴史を持つ静岡高校・浜松北高・沼津東高・韮山高校・掛川西高のうち、掛川西高だけが誤った表記をされていて誠に残念です。ほかの4校はHP或いは、それぞれの『百年史』に「明治34年4月、静岡県何々中学校から静岡県立何々中学校に改称」と明記されています。画像22もご覧ください。

でもまあ、この辺の「分かればどうでもいいじゃんか」という好い加減さが掛川西高の伝統なのかもしれませんね。

さて、幕末に掛川藩校が教養館と改称された謎、松尾藩で当時の日本では最新式の稜堡式城郭が設計できた謎、福沢諭吉が掛川藩に好意的であり、また掛川藩主太田資美も慶応義塾に多大な寄付をしている謎。これらを解く仮説を2つ考えてみました。

文書20をご覧ください。これは明治3年10月22日の福沢諭吉書簡です。

これは福沢が、二宮尊徳の4高弟の1人とされる福住正兄の経営する箱根の旅館に宿泊した際の手紙です。岡田良一郎も4高弟の1人であることは言うまでもないですね。ここに「藤沢にて甲賀君に別れ」とあるのは、掛川藩から唯一人、長崎海軍伝習生となった甲賀郡之丞の子供です。甲賀は当然、当時としては最新の軍事知識・技術を持っていますから、「教養」という言葉を知っていた可能性はありますし、稜堡式城郭のことは当然知っていますし、甲賀の本家は掛川藩の家老で、郡之丞も150石取りの槍奉行ですから、掛川藩と福沢諭吉を繋げることが出来たかもしれない。でも推測だけで、決定的な証拠はありません。

福沢諭吉が明治17年1月22日に甲賀伸郎に宛てた書簡もあります。**文書21**です。これは蒸気船の改良の歴史について福沢が甲賀に教えを乞うたものです。

もう一つの仮説は葦山代官、具体的には代官所の世襲の手代である柏木忠俊です。柏木は長崎留学時に福沢諭吉と知り合い、後々まで深い信頼関係がありました。また兵学者としての力量は言うまでもないでしょう。

一方、掛川藩は伊豆に約7000石の領地を持っていたので、葦山代官所とは関係が深く、黒船襲来前にも下田港にイギリス船が入港した際に、葦山代官所の指揮下で警護に当たっています。また維新の転封の際には、伊豆の領地を葦山代官所に引き渡しています。そんな柏木であれば、掛川藩の「教養」も「稜堡式城郭」も理解できますし、掛川藩と福沢諭吉を繋げることも出来たでしょう。

ただ、これも推測だけで、決定的な証拠はありません。

なお柏木忠俊は維新後、足柄県令となり、明治6年、葦山に学校を作りますが、これが葦山高校の前身になります。

葦山代官所は長崎海軍伝習所にも手代を数人、送り込んでいますから、もしかしたらこの2つの仮説は、福沢諭吉に象徴される慶応義塾、江川太郎左衛門に象徴される葦山代官所とが、長崎海軍伝習所を通じて掛川藩とネットワークを作り上げていたということのコインの両側なのかもしれません。

そして、そのネットワークの周辺に岡田良一郎と柳生寧成がいたということだと私は

考えています。

最後にご提案です。**文書22**をご覧ください。これは各高校のHPの沿革欄なのですが、浜松北高も沼津東高も、前期浜松中学校・前期沼津中学高の歴史は、全く無視ですね。沼津東高なんか、新制高校になる前の記述は僅か2行ですよ。これはこれで一つの見識だと思います。「過去はどうでもいい、今の沼津東高を見てくれ」ということなのではないでしょうか。

次のページは福岡の修猷館高校、山形の興讓館高校、豊橋の時習館高校のHPの沿革欄です。修猷館高校なんか慶長5年から書き起こしているんだから図々しいですよ。時習館高校だって、吉田藩校の時習館とは殆ど関係ないんですよ。で、静岡県内でこんな沿革を書こうと思えば書くことができるのは、掛川西高だけなんです。ましてや2人の初代校長がともに掛川藩校に学んでいるのですから。

「藩校と繋がってるからって、何の価値があるの」と考える人には無意味な議論ですけど、それを言っちゃったら、いま掛川市が推進している「松ヶ岡プロジェクト」だって無意味ですよ。私は今の自分があるのは先人のお蔭だと思っているので、掛川の沿革は是非1800年代初頭の北門書院から書き始めて欲しいと思います。

文書13にもう一度戻ってください。

掛川に藩校を作ったのは松ヶ岡4代目山崎万右衛門の資金援助があったとありますね。この山崎家の住宅を修復・復元するのが「松ヶ岡プロジェクト」です。だから、掛西と松ヶ岡には200年来の縁があるとも言えましょう。

あと、市役所には箱モノだけでなく、文献にも目を広げていただきたいと思います。現在の『掛川市史』は松尾に残る藩政資料の大部分を活用していません。この数年、松尾町と3町村が合併した山武市では掛川藩政資料を意欲的に出版していますが、掛川市立図書館にはそれすら所蔵されてないんですよ。いまや旧・大須賀町も掛川市ですから、昨年、掛川市に寄贈された西尾家文書や、千葉県鴨川市に残る横須賀藩政資料も含め、太田家文書や、千葉県山武市に残る掛川藩政資料が新しい『掛川市史』には活用されることを望んで止みません。ご清聴ありがとうございました。